山をおりる

柳瀬川ひろし

私は冬の到来を納得できずガラス窓を凝視する。ガラス窓の内側はまだ秋だ。誰かが顔を近付け過ぎてガラスの表面に残した油脂の模様がソラマメに見えた。多分ソラマメだ。

たった８ミリのガラスの厚みが私に冬を納得させられないで悔しがっている。もうすぐ私は山をおりる。多分雪が積もる前に。

今年も山小屋を閉める準備が始まった。私の準備は心の整理だけ。荷物はほとんどない。下界ではそこに合わせた生き方をしなくても居場所なんていくらでもある。下界で生きるためには物が必要なのではない。心の構えが必要なのだ。山で暮らすのとは異なる問題がそこかしこにあるのが下界だ。

山をおりると四ケ月間は大きな病院のある街で過ごす。山仲間にはさらに山奥を目指す者もいる。だが私は街で暮らす。それが私。

私は下界の暮らしが苦しくて山に逃げた。にもかかわらず、今では下界で山にのぼるための動機付けと充電を行っている。

山をおりたら私はタダヒコ君に会う。毎日のように会う。誰に頼まれた訳でもない。私がまだ会わなければならないと考えているからだ。

タダヒコ君は恋人ではない。けれど茶色のネックウォーマーをあげたことがある。恋人とは異なるぎりぎりの親近感を込めて。茶色はタダヒコ君のお気に入りの色。そんなタダヒコ君が、ある日唐突に進化した。

ここで働き始めた頃は、タダヒコ君のために病院のベッドをメイクしてあげたいと本気で思っていた。だけど、今の私にはタダヒコ君がベッドで寝ているのか、ベッドがタダヒコ君を寝かせているのかさえ分からない。

タダヒコ君は病院にいる。もう９年になる。タダヒコ君は体を動かすことができないので、山をおりた私が会いに行く。私は一方的に山の話をする。山の話にバイクは出てこない。バイクの話をした方が良いのか、しない方が良いのか、私は未だに判断がつかない。

山の暮らしは早起きが基本だ。そのため自然と早寝が身に付いてしまった。宿泊客は山の不便さを承知の上でやって来る。だから設備に対してクレームが付くことはまずない。だが、早起きしない登山客はいない。結局私は早寝して早朝に備える。小屋を閉める前日までその生活が続く。

私には山をおりるまでにどうしても会いたい人がいる。

仮に0君とする。0君に会ったことのある人は間違いなくその興奮を抑えられない。その時の様子を機関銃のような勢いでしゃべる。普段は無口な人であってもだ。そして当然のことだが0君についての話には共通点が多い。

0君は話しかけられても答えない。活発に動いている時は「シューッ、シューッ」と風のような声を出している。木から木へロープを使って飛び移る。川の上にロープを張って綱渡りをする姿を見た人もいる。上半身裸のこともある。服装は茶色で統一されている。とにかくじっとしているところを見た人はいない。色白でムキムキの筋肉マン。

ついこの前宿泊した女性も興奮した様子で「もう１１月よ、こんなに涼しいのに川の中に飛び込んだのよ。そして淵に垂らしてあったロープに掴まるとするするっと登って行ったわ」と目を丸くしていた。

沢沿いに歩いていると帽子が落ちているのに気付いたという。それも茶色の。不思議に思いながらもそのまま進んで行くと、茶色のＴシャツ、茶色のズボン、川に飛び込む茶色のトランクスの男、となったらしい。

お風呂はどうするのだろう。タダヒコ君はベッドの上で寝たきりだ。これまで私は考えたこともなかった。

山をおりたら訊いてみよう。

タダヒコ君はバイク乗りだった。１６歳になるとすぐに免許を取った。オフロードバイクで林道を走るのが好きだった。レースに出たという話は聞かない。アスファルトの峠でコーナーを一つ一つクリアしてゆくのも大好きだった。イメージ通りにコーナーを駆け抜けてゆく感覚がたまらないと夢中になって話してくれた。けれど後ろには一度も乗せてくれなかった。

そんなことが起こるとは思ってもいなかった。林道でガードレールに激突し、両足とも下肢切断の重傷を負った。さらには脊椎損傷のため車椅子生活を余儀なくされた。

私が人生初の巨大な悲しみを病院の廊下で振り払いやっとの思いで病室に入ると、必ず直してもう一度自力でバイクに乗るんだと力強く話してくれた。私を気遣ってくれたのだ。病院から帰った翌日、タダヒコ君のお母さんから電話があった。タダヒコ君が４階の病室のベランダから飛んだと。

尾骶骨の複雑骨折、脳挫傷。

面会はできないとのことだった。

私は何としてもＯ君に会わなければと思う。山小屋で働くようになって４年。私は山と病院でしか生きていない。山ではタダヒコ君のことしか考えないようにしてきた。だけどＯ君のことを知ってからは無性に0君に会いたくなった。ここ一週間ほどはなぜかＯ君が近くにいるような気がしてしかたがない。今日はカフェを休んで沢伝いに歩いてみよう。

私がタダヒコ君に面会できたのは転落事故から二か月後のことだった。

タダヒコ君はそれまでのタダヒコ君とはどこか違っていた。表情はとても柔らかくなっていた。その若者はタダヒコ君の気のいい兄弟ではないかと思うほど事故前のタダヒコ君に似ていた。

タダヒコ君は眠っているようだったので、私は視線をそらしてゆっくり息を吐いた。２０数えたところで息を吸った。

眼の前のビルがどろっと溶けた。私はリノリュウムの床が滲んでゆくのを見続けた。私が顔を上げるとベッドと一体化した若者は精密に描かれた静物画のように病室に展示されていた。呼びかけても手を握っても反応はなかった。

タダヒコ君は左脳を損傷した。意識はずっと混濁したままで楽しい夢を見ながら眠り続けているのよとお母さんは微笑みながら言った。それは昏睡状態ということなんだと悟ったのは何度も見舞いに通った後のことだった。

午前中の曇り空が嘘のように晴れ渡り、いつも見ている山頂は青空を突き刺すように尖って聳えていた。私はやがて訪れるいつかのために、準備しておいた茶色のロングパンツと茶色のダウンジャケットを羽織ると、これも茶色のニット帽を被って勝手口に立った。

今日こそ会うのだ。

メレルのジャングルモックに足を入れると勢いよく外に出た。沢に下りるまではかなりの距離を歩かなくてはならない。ポケットからグラブを取り出すと、一本一本指を確かめながら装着した。Ｏ君に会う準備は整った。

タダヒコ君はあれからずっと眠り続けている。私は最初そんな現実を受け入れることができなかった。今では確信している。タダヒコ君はバイクでコーナーを攻める夢を見続けていると。タダヒコ君の見る世界はいつもフルフェイスのヘルメット越しだ。そこには次々とＲの異なるコーナーが現れる。タダヒコ君はコーナーを見切ると進入速度を決めバイクをバンクさせる。走っても走ってもコーナーは続く。言葉はいらない。

楽しくてたまらないのだ。
どのくらい歩いただろう。少し汗ばんできたところで沢に続く急斜面を駆け下りた。シーズン中はアマゴ釣りが入っているので、沢伝いに歩くことは困難ではない。大きな岩がいくつかの淵を形成している場所まではもう少しだ。
気を引き締めた時、沢を覆う低木の枝に茶色のジャケットが揺れているのを見付けた。O君だ。私は走り出したくなるのを我慢し足音を忍ばせて進んだ。だが、予感した前方の岩の上にO君の姿はなかった。
O君は川の中か、そうでなければ木の上にいるはずだ。きっとO君は気持ち良さそうな表情で私のことなどお構いなしに遊んでいることだろう。
私は0君の口真似を何度も何度も繰り返しながら沢伝いに歩いた。
「シューッ、シューッ」
私の声はやがて大きくなり沢じゅうに響くように聴こえた。突然、こだまのように「シューッ、シューッ」と重なる声が聴こえた。
「シャーッ、シャーッ」
今度は私の声とは異なる声が先に聴こえた。
0君だ。私は足を止めて振り返った。(タダヒコ君かもしれない)
0君の姿はない。落葉し忘れたいろはもみじの葉が1枚、どこからともなく舞い落ちてきた。やがてその声も聴こえなくなった

私は進化前のタダヒコ君と過ごした無垢な空気感を思い出していた。

私はこの出来事だけでとても満足だった。自然と体が軽くなり駆け出したくなった。急斜面を軽々と駆け上がると、山小屋までの道を一気に走った。

タダヒコ君の意識が戻らないかもしれないと知らされた後、私は病室を出て自動販売機に向かった。缶コーヒーのボタンを押し続けたが、缶は落ちては来なかった。そのことが悔しくて余計に涙がこぼれた。その反面なぜかほっとした気持ちになった。そんな自分が恐ろしく残酷な人間に思えて病室に戻れなかった。私はタダヒコ君から逃げて山小屋で働くことを選んだ。病院通いを続けることができたのは、山小屋という負い目があったからかもしれない。

0君に会えなかった私は、会えた以上に0君を身近に感じることができた。私は多分進化したのだ。

高く聳える山頂が夕陽に照らされて柔らかい表情を見せた。私はもう山には戻って来ないかもしれないと思った。